

## 養護教諭の援助を再考する 2つの分析的アプローチから援助をみる

立命館大学応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター

本研究は、教育現場のなかで、養護教諭としての位置づけ、役割を相談活動を中心に見ていく中で、課題を明らかにすることを試みた。方法としては、今までの事例を今まで保健室から見た、事例の取り扱い方と違う、本人を中心にしたネットワークの側面と、養護教諭として、様々な生徒との出会いの中で、適切な援助ができていのかどうか、個別事例を取り上げ、再考することで、課題を明らかにすることである。

養護教諭は、時代の要請によってうまれてきた。その時代の必要性に応じて、対応してきた。そして、現在は生徒の内的葛藤が身体化として表現されるようになってきて、生徒の言葉にならない身体化された気持ちを受け止める場としての役割も重視され始めている。

養護教諭は、一人職場のため、その個人に左右される保健室経営が多い。そこで、お互い研究しあうための土台として、ネットワークから見る事例、「養護教諭による養護教諭の特性についてのアンケート」に個別事例をあてはめてみると、今までと違う視点での考察ができることに気づいた。

それは、まず、ネットワークについては、図式化してみると、どれだけの人が関わり、キーパーソンがその状況に応じて代わっていくことがわかる。養護教諭としては、つなぐ役割だここでは、いえるであろう。

また保健室が、養護教諭の個人の思いだけで、運営されるのではなく、ベースに一貫性をもつためにも、養護教諭同士の研修は、欠かせない。少人数だけに、周囲との連携をつくることは、生徒が学校生活を送る上で困難な状況に陥ったとき、すばやく対応できるであろう。また、仕事が多様化しているため、今、何を重要視するのか見極めることと、今の問題点を捉えるアンテナを持つ必要性が求められている。一人では、とてもできないことである。従って複数配置の必要性と、学内の連携をつくっておくことは、ベースとして欠かせないものである。

そのために、聴くことができる養護教諭が求められている。また、聴くことのできる教員の存在も重要であろう。スクールカウンセラーも同様全体的な視野でものをみて、個々人に対応していくことで、学内に根付く、貴重な存在となり得ると考える。